

(第 131 回) 神奈川研究会議事メモ

開催日	2022 年 7 月 12 日 (火)	出席者 敬称略	西村二郎・大谷宏・山崎博・持田憲秋・ 宮本公明・神田稔久
時間	15:00~17:00		
場所	かながわ県民センター		
資料	アメリカについて考えるーアメリカでは、今、何が起きているか？ー		
議題	<p>1. 技術課題 アメリカについて考えるーアメリカでは、今、何が起きているか？ー</p> <p>課題の概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アメリカは、今、崩壊の危機にあるのか？ ・従来のアメリカのイメージ ・現代のアメリカ社会のイメージ ・アメリカ社会の政治的・経済的分断化 ・アメリカ社会の不寛容化、及び、硬直化 ・犯罪多発社会 ・メディアが公平・公正な情報を報道しない社会 ・所得格差が拡大、極端化している社会 ・お金で政治を動かせる社会 ・アメリカ二大政党の変容 ・アメリカは何処に向うのか？ ・「グローバル化」と「国際化」の違い ・アメリカ社会の変容 ・グローバリズムとは？ ・ナショナリズムとは？ ・結語 <p>発表者からのコメント</p> <p>本年 2 月に出版された山中泉氏の「アメリカの崩壊」という本を読んで、近年、アメリカの政治、経済、社会が、嘗て私が知っていた（そして、私が現在もそうだろうと考えていた）自由、平等、民主主義を尊重する前向きで明るいアメリカとは異なり、大きな変容を遂げている様子を、改めて思い知らされました。そこで、この山中氏の著書を読んで私の抱いた私の「アメリカ感」を紹介し、神奈川研究会員の皆様方がどの様に思っておられるかについて意見交換の場を持ちたいと考え、このプレゼンテーション資料を作成しました。</p> <p>残念ながら、7 月 12 日の神奈川研究会では、私の発表に時間掛ってしまい、ディスカッションの時間がほとんど取れずに終わってしまいました。是非、本ページ上で、皆様の忌憚のないご意見、ご感想をお聞かせください。</p> <p>尚、7 月 12 日の発表の際に、時間がなくて申し上げられなかった事項が 2 点ほどありましたので、以下に追記しておきたいと思います。</p> <p>第一は、「どうしてアメリカ社会の変貌について、そこまで気に掛ける必要があるのか？アメリカの事はアメリカに任せておけば良いではないか！日本人として我々が気に掛けねばならないのは、日本国の事ではないか！」との意見を持っている人もいらっしゃると思います。確かに、この指摘は尤もだと思えます。しかし、私の方とし</p>		

ては、経済、社会問題については、日本は独立国としてそれなりにやっていると思いますが、国際政治や外交面においては、日本はアメリカの影響を強く受けており、必ずしも日本だけの国益に立って日本が行動できるわけではありません。ましてや、国家安全保障面について言えば、日本は自分の国を自分で守れるほどの防衛能力を持っておりませんから、いざという時にはアメリカに頼らざるを得ない弱みを持っています。このような状況を考えれば、日本人がアメリカ国の変容を気に掛けざるを得ないのは当然のことですし、まして、今、世界は、歴史的な大転換期に差し掛かっていると言われておりますから、日本人としては他国の動向、なかんずくアメリカの動向には細心の注意を払っていかねばならぬ時期にあると考えます。

第二は、今回の私の情報分析のベースに、山中泉氏の「アメリカの崩壊」という本に書いてある情報を使っている事に関して、です。確かに彼はアメリカに40年以上も住んでおりアメリカ社会を見ているかもしれないが、社会学者でもない彼の見方は一面的に過ぎるのではないかと、彼の書いていることが本当かどうかについて裏を取る必要があるのではないかと、疑問を抱く人があっても当然です。私は、この疑問に対しては次の様に答えたいと思います。確かに、私は、山中泉氏の著書の情報を信用して、例えば、「Mr. とか Miss. とか He とか She という言葉を使っていけないといったポリコレ現象がアメリカではここまで進んでいる」と、特にその証言の裏も取らずに、使用いたしました。しかし、それは、あくまでも「アメリカ社会の不寛容化、硬直化の事例の説明であり、「アメリカ社会の分断化」とか「不寛容化、硬直化」「犯罪の凶悪化、増大化」「所得格差の超拡大化」等の現象については、別に山中泉氏の彼の著書の中で初めて指摘している現象ではなく、日本のアメリカ研究者の間で、もう20年以上前から指摘されてきている既知のアメリカ社会の現象なのです。だから、山中泉氏の挙げている事例に、もしかしたら不適切な情報があるかもしれませんが、アメリカ社会の社会現象としての「分断化」「不寛容化、硬直化」等々については、まず間違いのない事実であり、それがびっくりする位の水準にまで悪化している事を示すために山中泉氏の著書を活用させていただいた、と解釈していただければと考えます。

最後ももう一つ指摘しておきたいことがあります。この本を読んだ人は、もしかすると、「アメリカ嫌い」になってしまう人がいるかもしれません。しかし、そこは、ちょっと要注意でしょう。この本の著者である山中泉氏自身、現在のアメリカ社会の深刻な問題を沢山指摘していますが、彼は、決して「アメリカ嫌い」にはなっていないようです。又、日本人が書いた「アメリカ礼賛」や「アメリカ好き」の本は依然沢山出版されております。例えば、岡田光世さんの「ニューヨークのとけない魔法」シリーズのエッセイは日本で何十万部も売れ、日本人の間に、米国好き、ニューヨーク好きの人間を増やしていると聞きます。更に、アメリカの中には、本当に素晴らしく、又、とても優れた人が沢山いるという事実も忘れてはなりません。例えば、最近、アメリカで50万部以上売れて大ベストセラーになった”Black Out”という本があります。著者は未だ20代の黒人女性(Candice Owens)ですが、彼女は2024年の大統領選挙で、もしトランプが大統領になったら、副大統領に指名されるかもしれないという将来を大変囑望されている黒人女性だそうです。

以上

参加者からのコメント

神田 捻久

丁寧な発表者からのコメントで少し理解を深めることが出来ました。

私も、好むと好まざるに関わらず、アメリカの動向には細心の注意を払っていかねばならないと思っています。また、「アメリカ社会の分断化」とか「不寛容化、硬直化」「犯罪の凶悪化、増大化」「所得格差の超拡大化」等の現象については、様々な情報や、ニューヨークに住んでいる長男からの便りなどを通して感じていました。ただ、山中氏の指摘する（自分で読まずに大谷さんの説明からだけで申し訳ありませんが）、「メディアが公平・公正な情報を報道しない社会」・「お金で政治を動かせる社会」については、そのままでは受け入れ難いものがありました。確かに、アメリカのメディアは不偏不党で無いことは理解していますし、政治や選挙に巨額の資金が必要であることも知っていますが、山中氏の指摘は極論のように感じました。大谷さんの指摘の中での大きな論点は、グローバリズムとナショナリズムだったと思います。これまでアメリカが進めてきたグローバリズムは、私はアメリカ化と同じと考えていました。アメリカは、未だにメートル法が使われないように、過去にモンロー主義が言われたように、市民レベルでは最もグローバリズムから遠い国と思います。そのアメリカでのナショナリズム回帰は、ある意味で必然と思っています。

その文脈で、大谷さんも指摘された、ロシアのウクライナ侵攻をロシアのナショナリズムの観点から冷静に考えることは重要だと思います。

アメリカが好きですかと問われたら、私は、東南アジアが好きですと答えるでしょう。寛容と言うべきか、ルーズと言うべきか、タイ語でマーペンライ（琉球のナンクルナイに通じる）的な精神が好きです。（神田）

宮本 公明

●今回の発表を聞いて、2008年までサウスカロライナに8年住んでいた私にとっても、アメリカの変質は驚きでした。もちろん、冷戦終了後の新自由主義の広がりなどがあったのですが、帰国後すぐに起こったリーマンショックなどが結果としてナショナリズムを勢い付け、一部の巨大企業にはグローバリズムの果実を供給するといった、分断の種を蒔いたと思います。

●今回の発表のなかで、なるほどと思ったのは、民主党がサラリーマンの味方で、共和党が大企業の味方という今までの図式が変化していると指摘されている点です。特に、トランプを支持する層に貧しい白人層があることは、大統領選挙の時から疑問でした。これについて、大谷氏はグローバリズムの恩恵にあずかる金融企業家、IT企業家が民主党を支持しているからと説明されています。トランプ支持者がナショナリストであることを考えると、アメリカの分断は、グローバリズムの賛否に起因しているとも考えられます。

●世界規模での協業や生産分業はグローバリズムの果実のように捉えられることが多いのですが、すでに、GAFAの儲けが消費者の国に納税を通して還元されないという問題が指摘されています。この点について「人新世の「資本論」」（斎藤幸平 集英社）は、以前の資本論が資本家が民衆からの搾取を問題にしたが、今は先進国が後進国から資源や自然環境を採取していると述べています。この著者はこのような社会の問題解決策として公有財産化と持続性の追求を掲げています。いずれにしても、グローバリズムの問題点を解決していくことが今後の世界の課題だと思われま

す。

●大谷氏が触れなかったアメリカの政治に関連する要素としてキリスト教があります。私が住んでいた東南部はバイブルベルトと呼ばれる熱心なキリスト教信者の多い場所でした。選挙の前には、教会から「民主党は妊娠中絶を容認している。これは神の教えに反している」という手紙が配られます。少し前まで南部の州では、進化論を教えないところもありました。こんな状況が今どきになっているのか、

トランプを支援した福音派やカトリック教会がどのように動くのかなど、興味のあるところです。もし可能なら、このような点も解明いただければより理解が進むと思います。講師のコメントに書かれたように、日本はアメリカと切っても切れない関係なだけに正しく理解することが不可欠だと思います

西村二郎

* グローバル化時代、秩序を保つには、国連が機能していなければならない。ソ連崩壊以降は、半身不随状態ながら、機能していた。そして、米国が世界の警察官役を担当していた。しかし、今回の話では、それはもう望めない。

* ロシアのウクライナ侵攻を契機として、世界は冷戦時代に逆戻りした。警官がいなければ、無頼漢が我が物顔で闊歩する。これに対抗するには、民主主義国家による集団安全保障体制に頼るしかないだろう。その場合、米国に守ってもらうことは期待できない。自国領が侵略されたら、まず、自国民が血を流しても守る決意が必要である。当然、防衛費の増額も不可欠である。

* 極論すれば、米国に頼るのは核の傘だけらしい。

* 無頼漢国家にも秩序を守らざるを得ないと悟らせるような、グローバル化されたサプライチェーン網の構築が可能だろうか？

* アメリカンドリームは残るのではなかろうか。AI に自律的に猫の画像（「Googleの猫」）を見付けさせたのは、たしか、ベトナムから来たファンさんだった。今後も能力のある外国人は直ぐ力量を振るえるのではなかろうか。

* 「妊娠中絶が女性の権利」という主張には、私も同調できない。同性婚も虫唾が走る。トランスジェンダーも理解できない。

* 私は、SCE・Net の研究会活動もソロソロ幕引きの時期か、と思い始めていた。今回、大谷さんのプレゼンを聴き、“我が意を得たり”の気分になった。さすがに、神奈川研究会だけのことはある。まだまだ、残って勉強させて貰おうと思う！

持田典秋

アメリカは、私にとってはあこがれの国だった。中学生の頃から随分見たハリウッド映画の数々、オールデイズのポピュラー音楽、スポーツ、航空、コンピュータ等々いくらでも挙げられる。ベトナム戦争でイメージは落としたが、今でもそれはいろいろな形で残っている。

私は仕事や旅行合わせて数回のアメリカ訪問だけだが、いずれも楽しかった経験とおおらかで良いイメージしか残っていない。

しかし、最近は良く分からない国になって来た。大谷さんの話を聞いて、自分が知らなかった部分も含め、更にいろいろと考えさせられるようになった。

ただ、あれほど言われているにもかかわらず、未だに銃規制ができず、多くの人々や幼い子供たちまで命を落としている。

黒人に対する人種差別反対の声が上がっているのに、その黒人たちがアジア人に対して差別意識を抱き、暴行を働いたりしている。

単純な見方かも知れないが、もっともっと良識（これも色々あるかもしれないが）が働く国であって欲しいのだが。

自分で見届けることは不可能だが、アメリカが今後どうなっていくのか気になるところである。

山崎博

- 大谷さんがP.2で紹介されていますが、キャンディス・オーウェンズ女史はTwitterのフォロワー数が300万を超えるアメリカ保守系の作家・政治活動家で、2020年の大統領選挙直前に出した『ブラックアウト:アメリカ黑人による、“民主党の新たな奴隷農場”からの独立宣言』(方丈社 2022.4)が、日本の独立系ジャーナリスト我那覇真子(がなはまさこ)他によって共同翻訳され、最近、出版されました。
- 出版を記念し、この度、著者のオーウェンズ女史への我那覇さんのインタビュー動画がYouTubeにアップロードされたので紹介しておきます。頭の回転が早く、活力にあふれたこの二人は、同じ1989年生まれとのことです。動画中のアメリカ議会における公聴会での、オーウェンズ女史の反論の答弁が秀逸です。
<https://www.youtube.com/watch?v=BZm8Fhn02FE>
- 我那覇さんは、危険な現地報道を厭わない取材で注目され、YouTubeの我那覇真子チャンネルを、2020年のアメリカ大統領選挙の頃から良く見ていましたが、2021年にはメキシコ国境からの不法移民問題をメキシコ側から精力的に取材していました。現在はグローバル化の問題をオランダで取材中のようです。
https://www.youtube.com/channel/UCCYNZu_NQIm2-PzMyHg550Q
- 司馬遼太郎は、「アメリカ素描」(1986年読売新聞社刊)の中で、“民族・人種の多様さこそが巨大な人工国家アメリカの活力源となっている”と述べています。そこでは、アメリカを文明の国、日本をはじめアジアやヨーロッパの多くの国を文化の国と捉えており、“アメリカでは、様々な人種が、オデンのようにそれぞれ固有の形と味を残したまま1つの鍋に入っている”と表現しています。
- 国別のノーベル賞受賞者数(1901~2021年)は、アメリカ388人、イギリス133人、ドイツ109人、フランス70人、スウェーデン32人、ロシア31人、日本28人です。これを大学別で見ると、ハーバード大学160人、ケンブリッジ大学120人、カリフォルニア大学バークレー校107人、など、上位10校のうち8校がアメリカで、2校がイギリスのケンブリッジ大学とオックスフォード大学です。アメリカの大学が、如何に世界の知的人材を集めて環境を与えて競争させ、人種を超えて研究成果を上げているかが分かります。
- アメリカの活力を支えるのは多様な人材の才能を活かすチャレンジ精神です。スティーブ・ジョブズもシリアからの移民の子供です。貧しい家庭環境の中で、何回の失敗にめげずに夢を実現していきました。イーロン・マスクも南アフリカ共和国の出身で、カナダに移住後にペンシルベニア大学で苦学し、アメリカで起業しました。アメリカは失敗を恐れずチャレンジする文化があります。
- アメリカのGAFAMなど、現在、巨大な利益をあげているグローバル企業は、インターネット社会を予見して、1980年代から90年代に起業した若い企業です。失敗を恐れて決断ができない日本企業は、技術を持ちながら先行されてしまいました。日本の大学も世界の競争から取り残されつつあります。日本は政治も社会もなかなか変えられませんが、アメリカは政治と社会の分断を逆に活力に変える復元力があると思います。
- それにしても、グローバル化は世界各国における貧富の差を増大させました。アメリカにおいては1979年以降、所得シェアを拡大しているのは上位10%の高所得者層だけで、中間層と低所得者層は物価の高騰により購買力が失われ、反転の兆しが見えないとしています。この問題は日本を含めて世界各国で見られる経済構造問題です。少しでも解決に向けて、各国の政治力が試されます。

発表者からの追加コメント

皆様からの貴重な意見、コメントを有難うございました。今回は「アメリカ社会の変容と今後アメリカ社会はグローバリズムに向かうのか、ナショナリズムに向かうのか？」という話をさせていただきましたが、本当に心配なのは、実は、アメリカ社会のことより日本社会の問題だと思います。

皆様、ご存知のように、日本経済はバブル経済が崩壊した後 1990 年半ばより「世界で最も低い経済成長国」に落ち込んでしまい、そこから脱出できないまま推移して来ています。国の GDP で見れば依然として世界 3 位の地位を保っているとは言うものの、1 人当たり GDP で見れば、既に韓国には追い越されていますし、やがてタイ国にも追いつかれてしまうていたらくです。更に、もう一つ、急激な人口減少という厄介な問題をも抱えています。しかもこの人口減少は、従来多くの人達が予想していたよりずっと早いスピードで進行していて、とても危険な状況にあるとの指摘がされています。日本人がこれら問題の解決に向けて、一致団結して、対策に当たらないと、日本は大変なことになってしまいそうです。世界のグローバリスト達は、日本の優秀な技術や企業や貴重な文化遺産、更には土地不動産等が大安売りで買える絶好のチャンスが到来したとして、虎視眈々と狙っているのです。既に沖縄や北海道の土地や不動産だけではなく、東京や京都の不動産、文化的遺産も外国人の手にわたっているとの話があります。今、日本に求められるのは「世界政府と地球市民を作り出す理想のグローバリズム政策」に心を寄せることではなく、「日本の伝統文化や日本の良さを守り、日本経済の再興と発展を図るための、健全なナショナリズム政策」の追求ではないでしょうか。

2. 幹事会報告

教育活動では、化学工学入門講座が26名の受講者で開催中。昨年から半減したものの、数年前よりも多いので、損失はない。

窓の投稿が著作権侵害される危険について今後幹事会でガイドラインが出れば、神奈川研究会の議事メモのHPへの掲載についても対応する。

7月29日に東神奈川にある横浜市神奈川地区センターからハイブリッド研究会のテストを行う。

3. 今後の予定

8月 松村氏

9月 神田氏

10月 見学会

11月 小林氏

12月 持田氏

1月 山崎氏

2月 猪股氏

3月 飯塚氏

4月 西村氏

5月 見学会

6月 宮本氏

7月 大谷氏

次回日程	1. 日時 令和4年8月9日(火) 15時~17時 2. 場所 Zoomによるオンライン 3. 技術課題 松村氏から提供
次々回日程	1. 日時 令和4年9月13日(火) 15時~17時 2. 場所 かながわ県民センター 3. 技術課題 神田氏から提供